

# 知求会ニュース

2012年5月

第42号

## ◎ 博士前期課程、入学おめでとうございます！

2012年4月10日(火曜日)午後3時から国際学部大会議室にて、2012年度オリエンテーションが開催されました。学長からの新入生へのメッセージは宇都宮大学HP（アドレスは以下参照）に、掲載されています。

<http://www.utsunomiya-u.ac.jp/common/svsfile/topics/ID00000504binary1.pdf>

今年度の入学者は、国際社会研究専攻の第14期生 尹曉慧さん、何佳文さん、邱玉明さん、包金さん、李莉さん、若林信克さんの6名と国際文化研究専攻の第14期生 袁芳さん、袁満艶さん、王佳敏さん、韓雪花さん、谷泉さん、呉春花さん、陳佳敏さん、王偉鋒さん、劉人一さんの9名、そして、国際交流研究専攻の第9期生 アギーレヘレーラガブリエラさん、石崎達也さん、伊藤瑠依さん、金光一さん、熊谷百合子さん、小林ひとみさん、張磊磊さん、辻紀江さん、鄭春美さん、鄭思宇さん、鄭文さん、董瑞瑞さん、余密さん、劉洋さんの14名で、計29名でした。

## ◎ 博士後期課程、入学おめでとうございます！

今春宇都宮大学大学院 国際学研究科博士後期課程に入学する陳懷宇(国際社会研究専攻・第12期生)さん、木村範子(国際文化研究専攻・第12期生)と三成清香(国際交流研究専攻・第7期生)さん、進学おめでとうございます。今後の研究成果に期待したいと思います。(博士録15を参照)

## ◎ 学位授与おめでとうございます！

知求会の調査で把握した情報をお伝えします。

**鄭楽静(ZHENG Le Jing)** 国際学研究科博士前期課程第8期生

- ① 博士(人間・環境学) 京都大学
- ② 2012(平成24)年3月26日 人博第598号
- ③ 「在日中国人社会の歴史と現状ー在日温州人を中心に」

これまでの国際学部・国際学研究科(修士課程および博士前期課程)出身者の学位取得者は、博士(国際文化)(東北大学)・博士(文学)(名古屋大学) / (筑波大学) / (東北大学) 3名・博士(人文科学)(お茶の水女子大学)・博士(人文学)(パリ東大学)・博士(芸術学)(筑波大学)・博士(農学)(東京農工大学連合大学院) 2名・博士(国際学)(宇都宮大学) 2名・博士(経済学)(名古屋市立大学)・博士(観光経営学)(慶熙大学校)の計13名です。

## ◎ 掲載記事紹介

1. 下野新聞 朝刊 (平成 24 年 4 月 24 日発行) 4 面に、「私の下野新聞批評」と題して、「来月 6 日から新執筆陣」の内容で安藤正知さん(国際社会研究専攻・4 期生)のプロフィールが掲載されました。

## ◎ 国際学部だより

### ○公開シンポジウム「3.11 原発事故と国際学の未来」

2012 年 5 月 19 日 (土) 13:00~16:00 (入場無料・先着順・開場は 30 分前)

会場: 宇都宮大学教育学部 D 棟 2101 教室

ゲストスピーカー

小原一真氏 (フォトジャーナリスト・国際学部卒業生) 「フクシマと向き合うこと」

二瓶由美子 (桜の聖母短期大学准教授) 「フクシマで生きること」

コメンテーター 田口卓臣 (宇都宮大学国際学部准教授)

詳細は以下の HP をご覧ください。

<http://www.utsunomiya-u.ac.jp/topics/index.php?id=506>

なお、知求会ニュース第 41 号の「キャリア指南 05」に小原さんの寄稿があります。

### ○刊行案内

国際学部と国際学部附属多文化公共圏センターより 3 月末日に、宇都宮大学生国際連携シンポジウム 2011 「学生とアジア・日本の震災復興を考える—大学の専門性を活かした支援のあり方—」 報告書 56 頁が刊行されました。

**研究室訪問 35** 第 9 号から国際学研究科に関係する内外の先生方に寄稿をお願いしたコーナーを設けました。第 35 回には国際社会交流研究講座所属の松村史紀先生にお願いしました。

### 「二つの戦争のあとを生きる」

松村 史紀

社会科学の領域は、現状分析に近い学問であればあるほど、対象にしている問題の重大さとは裏腹に、どこか殺風景な印象を与えるものが多い。事実・データの集積や処理はそれだけで大変な作業であるが、それだけに豊かな発想を忘れた分析に陥ることが多い。よくいえば禁欲的だが、悪くすればデータの羅列に終わることも多い。名作は模倣を生む。現状分析に近い社会科学に惹かれるものが少ないというのは、それだけ名作をつくり出すのが難しいということだろう。若輩な身でありながら (あるいはそうであるからこそ)、いつもそう思ってきた。現状を知るためにこそ、歴史の視座と豊かな発想を大切にしたい。

国際政治学の泰斗であるシューマン (Frederick L. Schuman) は、『国際政治学』という大著の序文にこう記している。「理念のない事実は、事実に支えられていない理念よりもと

るに足りないものだし、一時的な、たとえ誤った理念であっても、理念がまるでないものに比べれば、よっぽど知的刺激があると思う」(松村訳)。理想主義を批判する現実主義の立場から、このようなメッセージが発せられることに、これまで何度も救われてきた。

さて、いま私が無謀にもめざしている研究課題は、二つのグローバルな戦争——第二次世界大戦と冷戦——の経験が、東アジア地域にどのような国際政治の基礎をつくりだしたのかを考えることにある。その初歩的スケッチは、近著(『東アジアにおける二つの「戦後」』国際書院、2012年3月)に譲ることにして、ここでは少しラフにこの問題を紹介したい。

まず、第二次世界大戦をとり上げよう。これは、まさに「総力戦」であった。宮崎駿のアニメ『紅の豚』(1992年公開)では、第一次大戦という「総力戦」を戦ったあとのイタリアが舞台になっている。主人公はかつてイタリア空軍の兵士であったが、戦闘で仲間をすべて失い、たった一人生還した。どういうわけかこの主人公、戦後は豚のすがたをして暮らしている。このすがたこそ、「総力戦」のみごとな縮図である。人間である以上、「国民」として国家と一体化し、その国民国家が自らの正義をかけて互いに争う。人間のすがたを離れた存在だけが、「総力戦」のなかで「人間らしい」生活を送ることができるという最大の皮肉がこの作品には込められている。

さて、この「総力戦」は第二次大戦において文字通りグローバルな展開をみせ、巨大な暴力を生んだ。悪である敵が徹底的に倒れるまで——無条件降伏まで——この戦いが終わることはなかった。だからこそ、圧倒的な力を背景にして勝者が戦後平和のかたちを決めることになった。敗者は、勝者のつくる平和に従うしかない。このとき生まれた勝者と敗者の区分は、東アジア地域においていまもなお大きな意味を持っている。例えば、日本の平和憲法はその象徴的な存在であるだろう。

つぎに、冷戦についても考えてみたい。これは核時代にあって、グローバルな戦争を交えることができない、それでいて正しさをめぐる争いがくり広げられた戦争だった。グローバルな「総力戦」こそ戦われなかったが、空前の核軍拡から局地戦にいたるまで、暴力はつきることを知らなかった。敵(ソ連の陣営)が完全に倒れるまで冷戦の争いが終わらなかったことを考えれば、このグローバルな戦争はすがたを変えた「総力戦」だったといえるかもしれない。

映画『V for Vendetta』(2005年公開、J.マクティーン監督)は、冷戦期につくられた英コミックを原作にした作品であり、第三次世界大戦後の英国を舞台にしている。この大戦によってソ連が米国に勝利し、英国がソ連(あるいはナチスドイツ)型の管理・統制社会にすがたを変えたという設定である。ここには、現実の展開とまるで正反対な冷戦のエピローグが描かれている。実際に第三次大戦は起こらなかったし、崩壊したのは西側世界ではなく、東側世界であった。ところが、この作品が描く世界を反転すれば、現実の世界に酷似する。大戦こそなかったものの、東側世界が自壊し、西側世界のしくみ(リベラルデモクラシー)が、少なくとも制度上は広がることで冷戦が終わったからである。第三次世界大戦をあたかも(架空に)戦ったかのようにして、この「総力戦」は現実にも幕を閉じた。

さて、この冷戦が東アジア地域に残したものは、あまりに大きい。朝鮮半島の南北分断、中台分断、さらに日米同盟など枚挙にいとまがない。冷戦の遺物がいまなお地域の秩序を支える基礎になっている。

われわれは第二次大戦と冷戦という二つの戦争のあとを生きている。戦後はおもに勝者が平和を形づくる。では、二つの戦後（平和）はそれぞれどのように結び合っているのだろうか。これを考察することは、事実やデータの集積にとどまらない、それでいてきわめて現代的な課題である。何よりも柔らかい発想がなくてはならない。それだけに、宇都宮大学の学生や教員各位とのコミュニケーションのなかから大きなヒントが得られることを期待してやまない。

(2012年4月16日原稿受理)

**博士録 15** 第22号から今後の博士誕生を鑑み、新コーナーを設けました。第15回目には今春入学された新入生にお願いしました。

氏名：陳 懷宇 (チン カイウ)

出身大学院：宇都宮大学大学院 国際学研究科 博士前期課程 国際社会研究専攻

専門：エネルギー政策・エネルギー分野における国際協力

所属研究室：中村祐司研究室

趣味：サッカー バasketボール 読書 テレビゲーム

研究テーマ：中国エネルギー政策の国際戦略 アジア地域のエネルギー協力の在り方 日中のエネルギー分野における協力の在り方

自己紹介：私は中国黒竜江省大慶市（大慶油田）から参りました。大慶油田の命名は地名からではなく、油田が建国10周年で発見されたということです。私は2008年7月に、中国の哈爾濱理工大学の日本語学科を卒業し、同年の10月に宇都宮大学へ留学に参りました。2回の大学院入学試験の不合格を経験し、2010年4月に無事に国際学研究科に入学できるようになりました。

修士論文の研究では、出身地の大慶油田有限公司におけるモンゴルとインドネシアでの事業展開の現状を調査・検討し、問題点を分析しました。中国の石油企業による新興産油国との連携の在り方を解明しました。

今、政情不安定を主な要因とする石油価格上昇を始めとする資源獲得競争等の課題が顕在化する中、平成23年3月の震災と原子力事故等、エネルギー、資源を取り巻く喫緊の課題は山積しています。今後、エネルギー政策に関する研究を多角的で積極的な挑戦していきたいと思えます。

知求会の皆さまのご指導をお願い申し上げます。

(2012年4月13日原稿受理)

氏名：木村範子（きむら のりこ）

出身大学院：宇都宮大学大学院 国際学研究科 博士前期課程 国際文化研究専攻  
専門：

所属研究室：渡邊直樹研究室

趣味：

研究テーマ：

自己紹介：

（2012年4月xx日原稿受理）

氏名：三成清香（みなり きよか）

出身大学院：宇都宮大学大学院 国際学研究科 博士前期課程 国際交流研究専攻  
専門：日本文学

所属研究室：丁 貴連研究室

趣味：読書

研究テーマ：ラフカディオ・ハーンと松江というトポス

自己紹介：平成24年4月に宇都宮大学大学院国際学博士後期課程に入学した三成清香です。修士論文では、ラフカディオ・ハーンと松江との関係について研究してきました。今後、このテーマについて、深く追究するため研究を続けるつもりです。よろしく願いいたします。

（2012年4月22日原稿受理）

**知究人 21** 第9号から特に、国際学部出身者で他大学院へ進学された方に、寄稿をお願いしたコーナー（ちきゅうびと）を設けました。第42号の第21回目は、大阪大学大学院に進学されている田巻研究室OGのハラ オサマさんをお願いしました。原稿締め切り日に本人から多忙のため投稿の辞退がありました。大変残念な結果です。

**海外だより 12** 第 27 号から国際学研究科、国際学部出身の海外在住者からの寄稿をお願いしたコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、海外在住者の積極的な情報提供を事務局にお寄せ下さい。今回は、農学部 OG の**関根理恵**さんをお願いしました。

## 「孤高の楽しみ」

関根 理恵

『パリ』ときくだけで、なんか遠いところにいる気がする。そう。飛行機に 11 時間も乗るほど離れているのだからそりゃ遠い。栃木から成田までだって何時間もかかる。佐野プレミアムアウトレットのバス停ができて便利になったといっても成田までだって相当一苦労だ。やっとの思いでチェックインをすませると、そこには何か足りない物はないだろうかと必死になって買い物を始める自分がある。ちょっと高くてもないと不便だから。なんて思ってカメラ電池を買ってしまったりする。なんだか無駄に重くなったポシェットをさげ、バリーズをヨタヨタと引きずって飛行機に乗り込む。もう飽きたというピークを 2 度ほど過ぎ、諦めたところにモスクーを過ぎたと言われ、急にヨーロッパは近いなんて錯覚をしているうちにちゃんとヨーロッパ圏に入る。せわしなく食事をすすめられているうちに、お茶もゆっくりすすれないままトイレが混み始め、いよいよパリに着く。

飛行機がゆっくり着陸し、なんとなくちょっとした興奮とともに運動会の時の入場門の向こうで校庭のトラックに向かっていく行進の合図を待つように、なんとも晴れやかな気持ちとともにどことなく心が広がったような気になりながらも、どうぞ どうぞなんて道をお互いにゆずりあいながら飛行機を降り、薄暗い長いトンネルをくぐったあと、よそ見をしながらスタンプを押す入国審査官の横を通り過ぎればそこはもうパリ。

11 時間も経っているのにまだそこには日が残っている。てれてれと大きな荷物が邪魔だなあと思いながら申し訳なさそうに満員電車で揺られて安心する自分がある。そうここはもう外国なのだ。

もう遠くまで来たんだ。お父さんはもう夜中で寝ている頃かなあなんて思い出しては、自分は外国にいることを改めて感じ、自由に羽根をのばせる自分にちょっぴりうれしさが込み上げる。もう十分に大人だというのに未だにこのような感覚に捉われるというのはどうということなのだろうか。外国にいる贅沢を味わう楽しみ。何度パリを訪れてもこの感覚は変わることがない。

やっとなりに着いたというなんともいえぬ安心感。そして、部屋に着き、飛行機の中で固くなった体をばしゃばしゃとシャワーで洗って特別な理由もなく不満足だった夕飯をぼんやり考えながら明日からの予定を考えるテレッとした時間。

久しぶりに会う UNESCO 叢の住人の笑顔を思い浮かべたりして、いつもメールで連絡しているというのに懐かしいような幸せな気分を味わう。しばらく会っていない近しい人々に会うことはどんな時でも楽しいものだ。そうそう。これこそが正しい時間の楽しみ方だ。

しかし、facebook とやらが流行ってからなんだか正しい楽しみ方ができなくなっている。

空港や街角で携帯電話が wifi の電波を拾った途端、友人らが Miollis の zigzag café で飽きることなくたむろっていることを知り、ドイツ人の Alex がパキスタン人の Raheel と一緒に Isamu Noguchi の le Jardinle Japonais の桜を眺めながら仕事休みに煙を燻らせていることも知る。そこでなんだかうれしくなって到着を知らせる電話などしようものなら、瞬く間に petite japonaise の左岸の到着が知れ渡り、できれば会いたくない偉い人の耳にまで達してしまう。これもこれで何だかわくわくするものであるが、あくまで電話の小さな画面を眺めながら一人ぼっちで味わうわくわく感である。冷静に考えればばかばかしい。

「うわー。驚いた!」「いや〜。本当に久しぶり。」「会えてうれしい。」「何時ついたの?」「今どうしてるの?」「ちょっと聞いてよー。」などなど、お決まりの会話でもコミュニケーションによって成り立つ会話は、楽しみを共有する贅沢な遊びだ。離れていた間の出来事や、最近のニュースを知らせ合う楽しみは格別なものがある。

わざわざ海を越え 11 時間も窮屈な思いをして来たというのに、facebook のせいで特別な瞬間を味わうチャンスを失くし、感動する機会をなくしている。

インターネットは時差をなくすすばらしい装置でもあるが、同時に、無沙汰の楽しみをなくすものでもある。楽しみを失くした悲しみに怒りを覚え facebook をやめ、e-mail も仕事以外は使わないアナログ生活をすることを決意した。

今日も、一昔前に、恩師からパリに届いた心のこもった丁寧な手紙を古文書解読するかのように矯めつ眇めつ眺めつつ、返事をずっと書けなくて本当に申し訳ありませんと心の中で何十回もつぶやきながら、ぼんやり明日は誰と食事に行こうかなど勝手に空想して夜の静寂を楽しんでいる。そしてまた、明日こそ手紙を書きます。といつものように大先生に向かって反省し、高くて白い天井を見つつ眠りにつく。

忙しくも楽しいパリ生活は、遠い栃木で一人暮らしをしている 93 歳の我が家のおばあさんを気かけながら、しばらく続く。

bachiganakereba, nigeru tanoshimimonai kôbô

(農学部 森林科学科 1998 年卒業生)

(2012 年 4 月 11 日原稿受理)

**海外留学今昔 06** 第 35 号から国際学部出身者および在学者を中心とした海外留学体験の寄稿をお願いしたコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、海外留学経験者および海外留学中の在学者の積極的な情報提供を事務局にお寄せ下さい。今回は、フランスに留学経験のある第 11 期生 OG・村上真須美さんとオルレアン大学に留学した岩本佳奈さんをお願いしました。

「人との出会いが人を動かす」

村上 真須美

宇都宮大学入学当時、考えもしなかったフランス留学のきっかけを与えて下さったのは、当時のフランス語教授、鯨井先生だった。フランス語の成績が良い訳ではなかったが「英語以外の外国語を身に着きたい」という感情が強く、勿論、実現するとは夢にも思っていなかった。当時の私はどちらかというと興味本位だった。

入国当時、まさに右も左もわからない状態。常に辞書片手に行動していたが、それでも意思疎通には苦労した。少しでもフランス語の音に慣れようと、移動中はラジオや CD を聞き、寮では常にテレビをつけていた。今思い返してみると私のフランス語習得にはとても効果的だったのだ。何より私の言語習得を助けたのは、最初の数日を迎え入れてくれたホストファミリーとの出会いだった。いつかこの人たちと自然なコミュニケーションをとれるようになりたい、という思いが強かった。寮生活が始まってからも隔週で遊びに行ったり一緒に旅行したりととても親切にして頂いた。言葉を習得するには、なぜ外国語を身につけたいのか、具体的な目的が大事なのだと体感した。目的があれば後は自然と行動する事が出来る。幸いインターネットが普及し容易に情報が手に入る為、時間があれば国営放送のニュースを見る等現在でも細々と学習を続けている。

3年次に1年程留学した人の殆どは卒業を1年伸ばしていた当時、私は何としてでも卒業を伸ばしたくないという思いが強かった。単位は足りていたが、卒業論文準備演習なくして卒業論文へとりかかる事は出来ない。言語学の佐々木一隆先生にお願いし、フランスからメールでレポート、レジュメを提出し卒業論文準備演習を履修した。その為4年の夏に帰国後すぐ卒業論文、就職活動を行い翌3月には卒業する事が出来た。もし遠隔履修が出来なければ私はフランスへの留学は諦めていた。それに、多忙を極める中、準備演習を遠隔で行い、さらに帰国後も熱心に指導をして下さった佐々木先生には大変感謝している。

言語習得や異文化交流も重要ではあるが、私にとってのフランス留学は出国前、留学中、そして帰国後と、当時出会った人々が与えてくれた影響こそが留学の価値であり、現在でも私の生活の原動力となっている。「人を動かすのは人。」使い古された月並みな言葉だが、日々の生活に追われる現代人にとっては改めて考えていかなければならない、大きなテーマの一つではないかと思う。出会った人々への感謝を忘れず、またこれから出会うであろう人々と、様々な影響を与え合い成長していけるよう、一つ一つの出会いを大切にしていきたい。

(国際学部 国際文化学科 2009年3月卒業生)

(2012年3月26日原稿受理)

## 「夢の実現！ フランス留学」

岩本 佳奈

私は2010年の9月から約1年間、フランスにあるオルレアン大学に留学した。  
フランス留学は私の中学時代からの夢であった。

交換留学の応募に応募したのは確か、締め切り当日だった。前日はほぼ徹夜をして、志望動機を書いた気がする。そして応募をしてから2～3ヶ月後、留学担当の方から留学が決まったとの電話を頂いた。電話は私がバイトをしている間にかかってくるまで、バイトの休憩中に折り返しの電話をかけた。留学が決めた時は、本当に嬉しくて、興奮気味に母に電話をかけたことを今でも覚えている。

留学が決めた後の半年はあっという間に過ぎ、フランスに向けて出発する日になった。飛行機に乗っている間は、留学ではなく旅行に行くような感覚だった。

そしてフランスに到着。空港では当たり前だがフランス語が飛び交い、私はその単語が聞き取れないことに、やっと危機感を覚えた。空港までは、オルレアン大学の学生とその家族が迎えに来てくれていた。パリの空港からオルレアン市内までは車で2～3時間ほどかかった。車内では、事前に覚えておいた自己紹介をしたが、それ以外のフランス語は全く話せなかった。そんな私を見て、英語で話してくれた。助かった。

フランスでは寮に住んだ。私は日本では実家から大学に通っているのだから、初めての一人暮らしだったが、思ったより困ることはなかった。

大学では付属の語学学校で、さまざまな国から集まった留学生とともに勉強した。授業が始まってしばらくの間、私は周りが何をやっているのかさえ分からなかった。日本にいる間に十分に勉強してこなかった自分の行動を後悔する結果となった。しかし、だんだんとフランス語にも慣れ、授業についていけるようになっていった。大学の先生方はユーモアのある人ばかりで、授業は毎回楽しかった。

留学の醍醐味は、やはり人との出会いだと思う。授業の後は、さまざまな国籍の友人たちと集まって、楽しく過ごした。また、フランスということもあってクレープパーティーもたくさんした。フランスは外食をすると日本よりも割高に感じるが多かったが、スーパーで売っている食品は日本よりもはるかに安かった。とくにアルコールが驚くほど安く、ワインなどは4～5€のものも種類が豊富だった。

また、私は授業が休みの間に、フランス国内だけではなくヨーロッパの国々を旅行した。これができるのもヨーロッパに留学したからこそだと思う。私は旅行した場所の絵葉書を集め、自分の部屋の壁に張っていたのだが、帰国する頃には壁が葉書でいっぱいになった。

フランスでの約1年間は本当にあっという間に過ぎた。留学をして、世界中に友人ができたこと、さまざまな場所を訪れたことなど、すべての経験が私の宝物になっている。そして、フランスが大好きになった。フランスに留学するという夢を果たした今、私は次の夢ができた。フランスと関わることでできる仕事に就くという夢だ。現在はその夢に向かって就職活動を行っている。

(国際学部 国際社会学科 在学生)

(2012年3月17日原稿受理)

## NEW

学生サロン 02 知求会ニュース第 41 号より現役学部生によるコーナーを設けました。

### 「心のこもった絵本訳」

伊藤 楓

先月 18 日に、タイのバンコクにて国際学部の先輩方との食事会が開催された。この食事会は先輩方から声を掛けていただいて実現したものである。初対面ながらも終始和気あいあいとした雰囲気でお互いに実りのある話をする事ができた。というのも、先輩方と私たちは直接的には関わりがないものの、ある活動において共通点がある。その活動とは、タイの東北部のシーサケット県のある村をフィールドにした国際交流である。

14 年前から始まったこの活動は、タイ語文章表現という授業が契機となっている。いらなくなった絵本を集めタイ語に訳すという授業形態は今も変わらず毎年継続してきている。「タイの子供たちに絵本を贈ろうプロジェクト」という名前で始まり、当初は泉田先生が加わるアジアの問題を考える会というボランティア団体と子ども財団と生徒が共同で村を訪れ、図書館の設立を手がけたそうだ。次第に訳した絵本も増えていき館内を一度整理整頓しなければならない程にまでなった。一方で、絵本を直接届けることによって見えてくる貧しい村の状況が活動の幅を広げることとなり 7 年前から本格的にサークル化した。大学の学園祭や各種イベントでタイ料理（カレー、ラーメン、チャーハン）の販売を始め、その売り上げは活動資金と子どもたちの奨学金に充てている。勿論、村での滞在費も売り上げで賄わなければならない為、学園祭のタイ料理販売における計画から実行に至るまでの苦難は相当なものだ。それでもこうしてこの活動が継続しているのは、徐々にではあるが子どもたちの教育環境が良くなっていることや屈託のない子どもたちの笑顔が垣間見えるからだ。そして何より、村の人々の計り知れないほどの私たちに対するナムチャイ（日本語で親切心を意味する）が私たちの活動意義を見出している。

このような活動を通して、子どもたちの教育環境を良い方向に変えることと村を近代化、産業化した社会にすることは、違うということをお互いに再確認したいいい機会であったと思っている。それはやはり、現地を訪れ人々のナムチャイに直接触れたからこそであり、学園祭に協力して下さる多くの方々のナムチャイがなければこの食事会も実現し得なかったからだ。現在、このナムチャイというサークルは 8 人という少人数で活動している。タイ語履修者が年々減少しており数冊の絵本しか子どもたちに送ることができないが、今も昔も心をこめて訳していることには変わらない。これもまた先輩たちが私たちに気づかせてくれたことである。

(国際学部 国際社会学科 3 年在学生)

(2012 年 4 月 17 日原稿受理)

**キャリア指南 06** 現役学部生に向けた企画として、宇都宮大学全学部から国際機関をはじめ、NGO・NPO や企業などで活躍する先輩方に執筆していただくコーナーを設けました。第 6 回目には友松研究室 OG の前川香子さんをお願いしました。

### 「NGO フィールドワーカーへの小道」

特定非営利活動法人（認定 NPO 法人）ソムニード 前川 香子

2001 年に国際学部国際社会学科を卒業しました、前川香子です。

現在は、岐阜県高山市に本部を置く特定非営利活動法人（認定 NPO 法人）ソムニードに勤務しており、海外事業部チーフとしてインドに駐在しております。当会の紹介を少しさせていただくと、インド、ネパール、飛騨高山で地域住民のやる気を引き出し、事業終了後も各地で活動が続くようなコミュニティ開発、地域づくりを行っています。「地域の課題は世界の課題」という信条を持ち、途上国の問題も日本の地方の問題も共通のモノがあると捉え、約 20 年間活動しております。詳しくは、ソムニードの HP をご覧ください。

(<http://www.somneed.org>)

大学卒業後での NGO への就職は、今でこそ特別な選択肢ではなくなっておりますが、私が卒業した頃は人材募集を探すことすら難しく、そもそも地方の高校を卒業した私は、大学に入るまで NGO の存在すら知りませんでした。そんな私が NGO ワーカーとして働いているのだから、不思議なものです。

大学では、様々な途上国問題や国際社会の変遷、学業の基礎を学ぶ 4 年間かと思いますが、学生の皆さんにお薦めしたいのは、日本、特に地方を知る、ということです。

私自身は、学部卒業後は、名古屋大学で修士号を取得し、その後日本の地方の NPO 団体に働きました。学部生時代はすぐに途上国で働きたいという思いを持っていましたが、大学院で研究を深め、フィールド調査を進めていくうちに、「日本ではこの問題はどうなっているのだろう？」と一旦立ち止まったのが良かったと思っています。学部生時代から児童労働問題に関心があった私は、大学院で、世界で最大の児童労働問題を抱えるインド、しかも都市スラム周辺に数カ月間滞在し、都市と農村の関係に気付きました。そして日本での子どもの問題はどうかだろうか？と。

それを探るためにも、大学院終了後に NPO に就職し、日本の農村部で勤務したのですが、そこでもやはり地方と都市の関係、引いては地域コミュニティの在り方について考えさせられました。

地域づくりについてスキルを深めたいと思い、現在のソムニードに転職するのですが、インドの農村部でも日本と同じ問題は起きています。例えば、

「教育が大事だから、子どもを町の学校に行かせる。だけど一旦町に出ると、村には戻って来ない。教育を受けさせると、農村から離れていく。どうすればいいんだろう？」

途上国の村の人たちにこう問われると、皆さんはどう答えますか？

学部卒業後、大学院で研究を深めるのも、一旦就職するのも、それぞれが良い選択肢だ

と思います。ただ一度は、日本の地方が現在抱える課題、その背景、その歴史、その取り組み等を知る機会も持つことは、将来、国際協力・国際開発の分野で働きたいと思う学生さんにとっても、最良の武器になります。

上述の村人からの質問の背景へ思いを巡らし、質問への答えを、皆さんもどうぞ考えてみてください。きっと皆さんのこれからの研究そして就職に役立つでしょう。

(2012年4月19日原稿受理)

(国際学部 国際社会学科 2001年3月卒業生)

**フォーラム** 2011年の師走を迎えて、皆様忙しいことと思います。(原稿集めに苦労しています。)今回は柏瀬研究室OBの水沼徹明さんと小池研究室OGの石川美和さんにお願いました。

### 「東日本大震災を経験して」

岩手県立宮古高等学校 教諭 水沼 徹明

私はおよそ7年前、平成17年の3月に、国際学研究科を修了しました。その年の3月に郷土岩手に戻り、念願だった高校の英語教師としての生活をスタート、初任3年間を内陸部に位置する奥州市の水沢工業高校で勤めた後、沿岸部の宮古高等学校に赴任しました。私の生まれ故郷はもう少し南の大槌町なのですが、宮古市も海と山に囲まれた自然豊かな土地で、毎日太平洋を望めることに感謝しながらの生活が続きました。

あの日、2011年の3月11日は、宮古高校に赴任してすぐに受け持った生徒達が卒業し、学年団の労をねぎらうため、職員で東京への解団旅行へ向かう日でした。それが、まさかあのような事になるとは・・・宮古市から自動車でも2時間ほどの場所にある盛岡市に到着した直後に、激しい地震が発生し全ての公共機関が止まり、何とかタクシーで宮古市に戻ったのが夜の10時。停電によりテレビも映らず、ほとんど情報を得られない状況でしたが、いえだからこそ、非常線が張られ、海へと続く道が封鎖された町からは、何かただならぬ空気、恐ろしいことが起こっているという雰囲気が感じられ、ただただ怯えていました。

3月11日は100名以上の取り残された生徒達の世話をするため、交代で学校に宿直しました。大きな津波が押し寄せたことだけは分かっていたから、自分の親の安否や家の状況がわからない生徒達の心情が気になりました。その日の夕飯は部活動合宿用の米をかき集め、ゴルフボールほどのおにぎりを1人にひとつずつ配りました。私にとっても人生で最も不安な夜だったかもしれません。ラジオや携帯のワンセグ放送で、被害の状況が少しずつ明らかになるにつれ、母親や親戚、友人の安否が気になり、眠れませんでした。

3月13日、夜明けとともに現れた世界は、その場にいた誰の想像をも遥かに超えたものでした。絶対に津波が来るはずがないと、誰もが信じていた場所、安全だと信じていた防波堤、防潮堤、防災センター、それらはことごとく津波によって浸食され、破壊されました。多くの人たちの命とともに。生徒や彼らの親たちの中にもなくなった方がいます。震

災から1年以上経った今でも、ただただご冥福を祈ることしかできません。

私自身も宮古市での住居、大槌町の実家、そこにあった思い出の品々、全て無くしました。親戚や友人の多くも犠牲になりました。そのような中で、母親が避難して助かったことを本当に有り難く思います。家族を亡くされた方の無念さを思うと胸がつかまります。

今回原稿を執筆するにあたり、震災時の状況よりも、その後の顛末について書くつもりでした。全国の皆様のご支援、悲しみを乗り越え、あるいは胸にして、それでも復興に向け動き出した被災地の人びとの実情をお伝えするつもりでした。しかし、気がつけばあの日の体験を吐露するだけになってしまいました。皆様に読んでいただくのにふさわしい文章かどうか自身がありません。誰かにあの日のことを聞いてもらいたい、という気持ちのはけ口になってしまったとしたら申し訳なく思います。

最後に、私は今、高校教員としてかつてないほど充実した日々を送っています。3月11日を境に、今自分がしていることの意義深さを強く感じられるようになったからです。自分は道路や家を作ることはできない。けれど、いまここで将来、宮古市や東北のために仕事をするであろう子ども達と向き合うことは、復興の種を蒔くことだと信じているからです。

(国際学研究科 国際文化研究専攻 第5期修了生)

(2012年4月20日原稿受理)

### 「ふりかえり」

宇都宮大学留学生・国際交流センター/

作新学院大学人間文化学部 非常勤講師 石川 美和

宇都宮大学大学院に入学してから早いもので11年の月日が流れた。この11年間、自分なりに仕事に子育てに全速力で突っ走ってきたつもりではあるが、先輩・後輩の方々のように胸を張ってご報告できるような、華々しい海外での活動や活躍はいまだにできていない。しかし、昨年の震災及び原発事故をきっかけに、いろいろな事を「見つめなおす」という機会が増えた。そろそろ自分自身も「ふりかえり」が必要な時期にきているのではと、ふと思い、今回この原稿を書かせていただくことにした。

大学院に入学した平成13年の春は、上の息子の中学校の入学式、下の息子の小学校の入学式、そして私の大学院の入学式と3回の入学式で大忙しであった。本当に大きな期待と夢で胸がいっぱいだった。しかし、大学院在学中の生活は週5日9時から1時まで日本語学校で4コマ授業をした後に大学院の授業、そして帰宅後はピアノのレッスン、主婦業、そしてその後に課題や授業の準備。とにかくハードで疲れ切っていた。入浴中に眠り込むことはしょっちゅうで、時々「つらいよー」と涙しながら「今さえのりきれば」と自分に言い聞かせていた。

今、思えば...甘っちょろい!笑えるほどに。ここ数年間に私に訪れたさまざまな出来事に比べて考えれば、むしろ、一番幸せな時期だったともいえるくらいだ。人生、もっとも

つとつらいことは山ほどあるものだ。二年半前の私へのがんの告知（結局はがんではなかったが）・入院・手術。そして同時期に娘の不登校と同居している義母の認知症の発症と介護。昨年夏には実父の転倒事故・入院・手術とその後の看護。今年は私の逆流性食道炎に胃炎、ピロリ菌。と、なんだか、高齢者の会話にありがちな不幸自慢、不健康自慢のようになってしまった...体調を崩し失意の中にいるときには「なんで私だけ？」などと思ったものだが、現代日本社会の同年代の多くの人々が経験している、全くフツウのことだと気がついた。医療制度、介護制度について、このトシになって社会勉強をさせてもらっているような気分にもなるし、震災後は親の介護にまともに向き合えるだけむしろ幸せだと思わなければいけないと考えるようになった。

今年で本学留学生・国際交流センターでの日本語の授業を担当させていただくようになって、9年目を迎える。日本語の授業は、日々、新たな発見と自分自身の勉強の場であり、とにかく楽しく、かけがえのない仕事である。この仕事を与えられている現状と周囲の方々へ感謝の気持ちを忘れずに、今後も授業に臨んでいきたい。震災、原発事故後、地震への恐怖やある程度の放射線汚染のリスク覚悟で来日する留学生の学習意欲とニーズに対し、少しでもわかりやすく、魅力的な授業をすることで応えていくことが私の義務であると考えている。

(国際学研究科 国際文化研究専攻 第3期修了生)

(2012年4月20日原稿受理)

### EU支部だより

第38号からイタリア在住の松原真実子さんによる知求会EU支部だより「Newsreel World」を発行することになりました。今回の第5号の内容は、1 イタリア再生可能エネルギー 2 EU支部だより太陽光発電についてです。配信方法は、画像が掲載されているために別便で配信します。ファイル容量が大きいことで、ニュースレターが受信できない場合にはその状況をお知らせください。

### ●編集者のひとりごと

前号に続き、今回も入稿に手間取っています。今回は予定の日時に配信する処置を取り、後日差し替え版で対応することにしました。皆様には大変ご迷惑をお掛けします。

---

編集後記：2010年4月26日から知求会ニュースのバックナンバーは国際学部同窓会HP (<http://www.afis.jp>) で見られるようになりました。

同窓会会員の皆様へのお願い：住所、勤務先およびメールアドレスの変更の際は事務局へメールして下さい。[chikyukai@yahogroups.jp](mailto:chikyukai@yahogroups.jp)

---

宇都宮大学大学院国際学研究科同窓会